

寺と、その訳業の内容とに何かの関連があるのではないかと察せられる。

この推測があやまっていないなら、菩提流支の訳出した『楞伽經』請仏品の宝山を、現実にこの地上に現出しようとする靈太後の願いがこの寺を生み、それが菩提流支伝に反映しているのではないか。

いすれにしても、この永寧寺の記事もまた、李賀の詩の一面とすこぶる相近い。

ほとんど同じころ魏都洛陽にきた菩提流支と勒那摩提が、はじめは訳業を共にし、のちに意見を異にして互いに相闘わなくなった。『楞伽經』は初期の訳業だが、そこに勒那摩提の意見は生かされているのか、いないのか。

いま二人が別に訳した同じ經の二三を平讀しても、別訳せねばならなかったほどの違いがあるようにもないうで、むしろ菩提流支訳が親切な感じはするが、そのようなことは、楞伽にひかれて菩提流支伝を讀んだであらう李賀にとつてはどうてもよく、永寧寺の美景と楞伽の美景をあわせ、また永寧寺の消滅と勒那摩提の昇天の不思議にうたれ、のちに楞伽の七卷本を勅訳させた則天武后と、永寧寺を建立した靈太後の類似した性格に驚くほうにいそがしかったのではないか。

そのような話をたえず肉親に話していたとすると、その傳わり方のどこかで、異国の語に親しまぬ婦人が勒那摩提の名を忘失し、名のない話を聞いた人が、その名に李賀の名をあてることは、ありうることではないか。

先年「楞伽—李賀小記—」を書いたとき、李賀の案前の楞伽を魏訳とする推測の根拠が弱いという批判を畏友たちから口頭で与えられた。

「世尊と夜叉王—楞伽經雜記—」は直接にはその論証をふくまないけれども、さきの小記とあわせて讀まれれば、わたしの推測にやや足場をととのえようかと考えた。その仕事を進める道すじで、菩提流支伝にぶつかつて、わたしには、もうほとんど疑いようがない気がするのだが、あるいはこれも、そうあつてくれればよいという願いが、幻のように二つを結びつけているのかもしれない。

魏訳『楞伽經』では「芽」の字を「牙」と表記することが多い。もとよりそれを芽とする異本もあり

また宋訳唐訳でも、牙字を用いる本もあるが宋本など古い板本では、魏訳はおおむね牙字を用い、他訳は牙字を使うことが多いようである。李翳が牙字を愛好することには、△雜記・□宮牙に書いた。

「二」まで書いてきて、読みかえしてみると、やっぱりひとり合点で、菩提流支伝と李翳小伝がわたしの内部で結びついた理由を、どなたに読んでいただいてもわかる明瞭さで書いていない。資料の断片を二つならべてほうり出しただけであった。

「世尊と夜叉王」もまた、あるところにくどく、あるところは簡単すぎて、これまた人の前にさし出せるようなものでない気がして来て、憂鬱である。この憂鬱を井戸べで柳の枝をふりまわして遊んだ菩提流支の碧眼へであつたらうに捧げることにする。

1974.2.12

楞伽經メモ

「楞伽—李翳小記—」を書いたのは一九六六年夏だった。当時わたしが手にした参考書は「大正新脩大藏經」第三十九巻におさめる漢訳三本と「国訳一切經」經集部七におさめる常盤大定「楞伽經解題」極超慧日魏訳訓読だけであつた。常盤の解題で鈴木大拙にすぐれた研究があることを知つたが、見るこゝとがでない。

小記を書き終つたのち、あちこちの図書館をさがし歩いたが、一九六八年九月、大拙の全集の第五巻が出て、そこにおさめる「楞伽經」―「楞伽經研究序論」の二論文を読んで渴をいやした。

その後、楞伽と名のつく研究は、目にふれるかぎりは見えてきたつもりだが、ひっくりかえり、部分的には修正意見もでてくるものの、鈴木説は定説としての位置を占めて、ほとんど疑われることはない。すなわち、楞伽全体は正しく無組織に縫合せられたる寫本の聚斂、ということになる。そうしてその尻馬に乗つたらしい解説家は、請仏品を蛇足だと断言する。

しかし、大拙論文は、なかなか慎重に書いてあつて、請仏品を蛇足などと輕視せず、その大意を、△大分自分の考へをまぜて紹介し、△本經の大意を一番よく纏めてあるのは△こゝだ、といつてゐる。大拙はしかしこの紹介には梵本と唐訳だけを使って、魏訳はほとんど問題にしていないうだ。

請仏品を後代の添加というのも、鈴木説が最初らしい。しかし、

『楞伽經』には呪文宗教の痕跡は認められぬ。ただ奇怪と思はれるのは卷首に左の一句がある。

「尔時大慧菩薩、与摩帝菩薩、俱遊一切諸仏刹土云々。」此に「摩帝菩薩」と云ふのは即ち大慧菩薩その人の梵語である。大慧、詳しく云へば「摩訶摩帝」(Mahamohiya)である。四卷本ではこれを「摩帝」とし、十卷本では「大慧」とし、七卷本ではまた「摩帝」と梵音を漢訳してある。梵本では「マハーマハ」である。とに角、『楞伽經』の對告衆なる大慧は、梵音でうつしても、意訳しても同じ事である。これを同一人と見るべきか、同名異人とすべきか、異人ならば、何故にこれに同名を附すべかりしか。同人ならば、「自分が自分と与に」と云ふは何の義に解すべきか。何か此処に哲學的・宗教的意義でも読むべきなのか。……これを『楞伽經』中に於ける唯一の摩訶不思議とする。

といつて、自説の後代添加説をくつがえす要素をも摘出してくれている。

この複数の大慧については拙文で解説を提出している。わたしは自分の解説に到達するとき、この鈴木説を忘れていて、あとで参照して見出し、驚いたのだ。この文をのせる『楞伽經』は一九三四年に発表された。それから四十年のあいだ、大慧の指摘した摩訶不思議Vにとりくんだ學者がいなかったらしい。

大拙は四卷から出発した。また大拙は經典加上説花やかである時代の人であった。鈴木説が四卷本にない請仏品を後代附加としたのは当然であらう。そのうえ大拙は、そののち楞伽經に力をさきえないようになつた。

楞伽經は、如實に見ることをくりかえしていう。わたしは、まず魏訳を読み、魏訳のありのままの姿を、なるべく疑わずに読むことをつとめ、そうする内、請仏品が中心で、他は其の注釈だということのみえてきた。請仏品が中心ならば、請仏品の構造とその中心思想とのからみあいを見視し、そのわかりにくいところを他品で照らしてみればよいわけだ。

そういうことを考へにしても、そこから論文めいたものを書くつもりはなかつた。ところが本誌に、「独吟聯句・昌谷詩」を書くうちにまた楞伽經が出てきた。まったく突然、楞伽經のほうから出てきたので、わたしが出そうともくろんで出したのではない。出てくると、どうしても、こんどは三本を対照

して一字一字の違いも注意して見なくてはすまなくなった。昌谷詩を、できればこの号で最後までもっていきたいと願っていたが、楞伽經が立ちふさがって聯句は頓挫する。そういうときこの二つは内面的につながっているのだ。人はお信じにならないかもしれないが、わたしはそう思う。楞伽經をもういちど読め、と李翼がいつているのだ。

そこで、三訳をコピーして、三段に对照的にはりつけた。前けそんなコピーも願望にはゆかなかったが、五年ばかりの時間のへだたりが、それを許す。この作業を終ってまもなく、明の田珂の『楞伽經会記』（続藏經）が同じような作業であることを知った。ただしこの方より、わたしのつくった对照本の方が一目で見たせるのでクタブレモウケではなかった。

南条文雄 梵文入楞伽經

鈴木大拙 The Lanka-vatara Sutra.

梵文楞伽經梵漢藏索引

泉 芳璟 梵文入楞伽經に見えたる一百八句

山口 益 智吉祥賢の入楞伽經註について

安井広済 入楞伽經における肉食の禁止

入楞伽經「無常品」の原典研究

入楞伽經の原典研究（現証品・如来常無常品・刹那品・変化品）

入楞伽經にあらわれる識の學說について

菅沼 晃 入楞伽經における唯心説について

などを参考にした。鈴木本の索引には、魏訳の文字にも梵文をあててあるが、魏訳の原典にあたる梵本はないのだから、あの中には大拙の推定がふくまれているはずである。しかし、あのおかげで、わかったような気のしたことばもあった。望月「仏教大辞典」中村「新・仏教辞典」Zinner「梵英字書」をなるべく丹念にひくことにした。

安井の諸文は大部分が梵本と山口論文という智吉祥賢の註（チベット文）とをつきあわせての翻訳でこれはいへん参考になった。魏訳が漢訳三本のうちもっともインド的（あるいはランカー的）だとい

うような推定を、仏教学には素人のわたしが大胆にもいつているのは、安井訳と三訳を比較したところ、さきに中村元『東洋人の思维方法』を通読したところによる。しかしそれの専門の人が考えてそういう考えはなりたためというようなおかしいところも多いことであろう。それをただおかしいと笑うのでなく素人のわたしになつてくするうちに教えてほしい。

菅沼晃の論文は、楞伽經を、楞伽經の立場から見ようとしてゐる点で、禪あるいは唯識あたりから見

てきた従来の学説をこえ、同感する。
ただ、素人の物知らずの無遠慮をさらけ出していうと、学者は理論好きで精密な理論には夢中になるが、風景にうっとり見入るといふようなところに乏しいような感じがした。楞伽經の立場にたつ菅沼がすでに請仏品について書いてゐるのなら、それをぜひ読みたい。

唐代の詩人で楞伽を愛読したのは、岑参・李頎それに李賀、いずれも一くせも二くせもある奇才で、どちらかといへばロゴスよりパトスに勝った男たちだ。だからロゴスにあこがれる、といえないこともないが、楞伽經愛好は、どうもそんなものではなく、かれらの狂気が楞伽の狂気に感応したのだとしか考えられない。

断肉食には、このたびは突つこめなかつたが、あれは、肉食そのことの禁止というようなピューリタンかたぎでは、人間が、人間を夜叉と名づけて動物あつかひし、略奪し、搾取し、強姦し、殺戮することに対するいましめなのだ。あの中に、夜叉すら肉食しなくなったのに人間が……というところがある、あの悲痛なげきは、戦後、米軍キャンプの中で泣きさけぶ日本の女の声を聞きながら、どうすることもできなかった男には、その意味がわかるはずである。

日本は、しかし、あのときのつらさをわすれ、そのつらさを人に与え出した。楞伽經を、李賀のためにでなく、みずからのために読む日がきているのかもしれない。

鈴木大拙博士には、戦後の最初の淺米から帰られたとき、はじめて逢つた。わたしは新聞記者の一人として、京都駅で出迎え、東本願寺の一室で共同会見があった。

写真で思いえかいていたより小さなおじいさんで、それがハデなリボンのカンカン帽をかぶり、遠く

の小學生のように水筒をかけ、列車からおりて、出迎えの人に会釈すると、水筒の水を飲んだ。カメラマンがそこをとるといいのに、と思ったが、だれもとらなかつた。若い女の記者がくすくす笑った。共同会見といつても、そう大勢いたわけではなかつた。あの当時、宗教家や学者を新聞はあまりはでにあつかわなかつたようだ。ルネ・クルッセ博士が入浴したとき、西本願寺で会つたが、新聞記者はわたし一人であつた。しかしそのときの宗教担当記者には勉強家が多くて、博士の善書をよく読んで、かなりつつこんだ質問を出したが、博士は、疲れた顔もみせず、に答えた。

——戦争はもう起らんと思われますか。

——さあ、とてもそううまくはいかんじゃろ。

——なぜですか。

——敗けたときちよつとはこりるが、また戦争したくなるのが人間というものらしいな。

——戦争しながらオダブツ、が人間の運命ですか。

——そうらしい。

——それじゃ、宗教なんぞ役に立ちませんな。

——そうかしれん。しかし、それじゃから、いろいろのじゃないかな。思うようになるのなら、政治だけでいいのじゃろが、思うようにならん。だから願ひというものが生れるのじゃろ。

そんな話もあつたように思う。博士は、相手が学者だろうが新聞記者だろうが老人だろうが青年だろうが、同じ調子で話していた。博士と話したたれもが飾り氣のない博士に好意をもち、話したあとは気分がからりと晴れた。

わたしは不勉強で、自分で楞伽經を読むまで、博士に楞伽經の研究があることを知らなかつた。その研究を読むと、あのときの博士の声がよみがえるような氣がした。

博士は、自分で楞伽經の研究を進めることができなくなつてからも、後進がそれを持続することを望んでいたらしい。

あの席にいた新聞記者のひとりが、研究とはいへぬ奇妙なものを、楞伽經について長ながと書いたと知つたら、「うん、まあ、そうも考えられるかしれんな、わしもようはわからんが」といつてくれる

1974.2.13

第八号

↓金属

11

べきか↓証明すべきときか 3

本号は、はじめから、おわりまで、楞伽經にかかわりのあるものばかりになった。「楞伽特集号」ということにしようか、とも思ったが、それはやめることにした。

詩人としての李賀に興味をもたれる方は、楞伽經に關心を寄せられるだろうが、その解説のつもりで書いたわたしの晦渋な八〇ページには厭悪されるのではないが、仏教に興味をもたれる方は、楞伽經の諸仏品注解ときいて關心を寄せられても、楞伽教団を剽窃とする仮説をみただけで眉につばをぬってこの冊子を捨てられるのではないが、そんな氣もしないではない。

「仏教關係論文索引」というものを見て、仏教學者の勇猛の精進に驚くが、楞伽に關する研究は多いとはいえず、もっともあの索引は大學紀要などアカデミックな雑誌にほぼ限定せられ、その範圍から離れた信仰者や研究者の作業はのっていない。論文索引にのっていない作業のなかにしばしばすぐれたものがあることを発見するので、現在の楞伽研究がとほしいと概括することはできない。

わたしは読むように、李賀が、楞伽經を読んだか。

李賀にみちびかれて楞伽を読んだ、とわたしは書いた。李賀がそう読んだのでなければ、わたしの解釈は出なかつたと思う。もちろん、わたしにはまだたくさん、李賀についてわからないところがあり、大いに誤解もしているに違いないとは思うが、方向としては相似たところを指しているだろうと感ずるのだ。

三島由紀夫は「陳商に贈る」詩の「長安に男子あり、二十にして心すでに朽つ」の二句を愛したそうだが、李賀の文学が、三島のそれとほぼまったく無縁であり、三島には完全に理解できない質の詩人であるために、その全作品の中からあの二行を切りとりえたのだ、ということだが、いまのわたしには、察せられる。わたしは、しばしば、理解できないものを愛する、理解できないから愛するのかもしれない。こゝえ、その師韓愈の卒年に近づいたわたしは、とてもわらう氣にはなれぬ。

本号の原紙をきりはじめたとき、いままでこの雑誌用につかっていたAプリントと称する三ミリメー

トル四方の枠目に画数の多い字をかきこむことが、わたしの目には無理であることをしった。そこで、他のものに使っていた雑誌と称する四ミリメートル四方の枠目にかえた。半紙では一ページの内容が少くなりすぎる。また半紙の値が上がりつつある。いっその際、紙をかえ西面印刷にしよう。それでこんな形になった。途中で原紙がなくなり、新しいのを買いにいって、たら、雑誌野は品切れで、当分補充はつかぬ、という。しかたなく、四枚原稿という、いま書いている原紙にかえた。案の定はなだ読みにくいものになった。用紙も、原紙も、インクも、みな目のとびでるほどの値になっていた。

昭和二十九年九月二十五日発行の『方向』は五六ページまでが黄色い半紙で、五七一三八ページが白い半紙だ。二十年たつて似た状態がえってきたのかもしれない。あの当時のわたしもしばしば眠れぬくらいなら起きて仕事をしようとガリバンをきった。このごろまた眠れぬ夜が多いが、ガリバンをきくことはできない。茫然と天井をながめているだけだ。

小学校で、教材のザラ半紙や中質紙が不足すると聞く。小学生の紙まで奪ってしななければならない雑誌ではない。この雑誌の使う枚数はわずかだが、わずかでも、やはりかすかにそちらに影響がある。状況によっては、次の号を出すのはかなり先になるかもしれない。これきりで出せないことになるかもしれない。長い間の読者各位のあたたがい支援に深い感謝をささげる。

とはいっても、休刊あるいは終刊のつもりはない。不定期刊の不定がいよいよ不定になるといつたけのことである。

『方向』もまた、同様の理由で、不定期がいよいよ不定になるだろう。

本誌の第八号はまだ少しのこっているが、それ以前のバックナンバーはもうない。『方向』ものこっていない。『方向』にのせた李賀論文だけ（但し「頌歌」を欠く）を京都女子大学文学部閲覧室が復写した。コピーサービスをしているので、もしご入用の方があればそちらに照会されたい。住所は京都市東山区東山七条。古いものでどうして読んでいただくには堪えまい、と思うけれども。

本号を、青苔水子・幽蘭水子・幻城水子に捧げる。

一九七四年二月十六日二十二時三十分